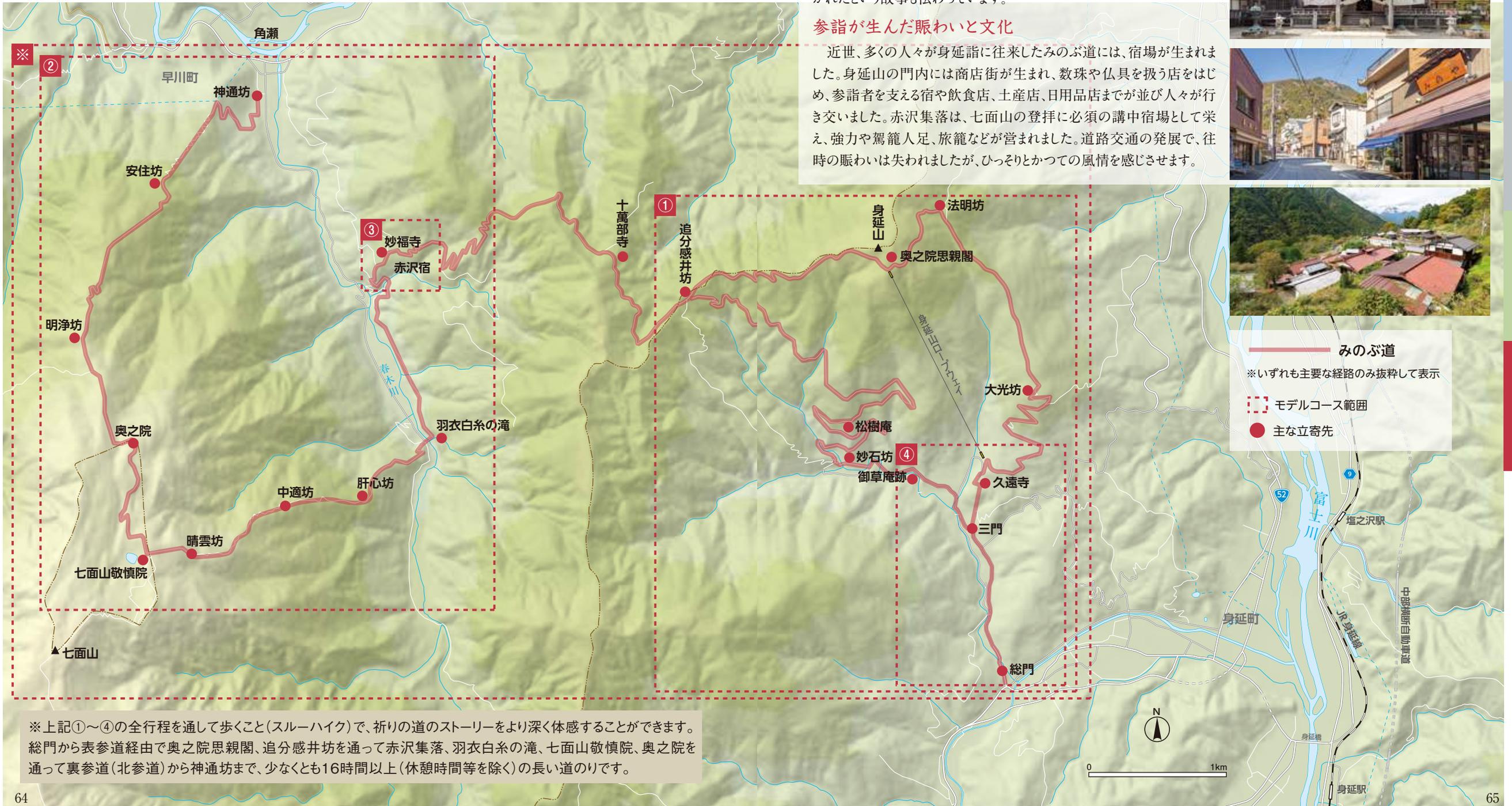


～祈りの道～

みのぶ道は「参詣道」「身延往還」「身延山追分道」とも呼ばれ、かつては、身延山久遠寺から大光坊、思親閣、赤沢宿、羽衣白糸の滝、七面山敬慎院へと続く、険しい修行の道でした。日蓮宗の開祖・日蓮聖人は、身延山を信仰の中心に据え、晩年を弟子の修行に費やしました。日蓮聖人の弟子たちは七面山への道を拓き、修行を行いました。こうして生まれた道は、近世に人々が身延詣に往来する道となったのです。

今もなお、荘厳な寺社仏閣、宿場の風情や門内の賑わい、鳴り響く団扇太鼓とお題目を唱える人々の祈りの声、神聖な自然の風景に出会うことができます。みのぶ道は、歴史と伝説が溢れる聖地の過去と現在に出会うことができる祈りの道です。



※上記①～④の全行程を通して歩くこと(スルーハイク)で、祈りの道のストーリーをより深く体感することができます。総門から表参道経由で奥之院思親閣、追分感井坊を通して赤沢集落、羽衣白糸の滝、七面山敬慎院、奥之院を通して裏参道(北参道)から神通坊まで、少なくとも16時間以上(休憩時間等を除く)の長い道のりです。

祈りの地・身延山の起源と継承

日蓮宗の開祖・日蓮聖人(1222-1282年)は、身延山を「祈りの声に満ちている」と称えて信仰の中心に据え、晩年を弟子の修行に費やし生涯を終えました。日蓮聖人が入山し、弟子たちを修行し、入滅され、弟子や地域の人々に継承され、今に至るまでの物語が、この地に残っています。

修行の山・七面山と龍の守護神

日蓮聖人の説法を聞いた龍が、法華経の守護神となり、七面大明神として鎮座しています。日蓮聖人が生涯かなわなかった七面山への登行は、弟子たちが遺志を継ぎ、道を拓き修行の場となりました。徳川家康の側室お万の方が白糸の滝で水垢離をして詣でて以来、女人禁制が解かれたという故事も伝わっています。

参詣が生んだ賑わいと文化

近世、多くの人々が身延詣に往来したみのぶ道には、宿場が生まれました。身延山の門内には商店街が生まれ、数珠や仏具を扱う店をはじめ、参詣者を支える宿や飲食店、土産店、日用品店までが並び人々が行き交いました。赤沢集落は、七面山の登拝に必須の講中宿場として栄え、強力や駕籠人足、旅籠などが営まれました。道路交通の発展で、往時の賑わいは失われましたが、ひっそりとかつての風情を感じさせます。

